

Hakusan Review of Anthropology

白山人類学

Vol. 21 March, 2018

Preface: Dr. UENO Hiroko and Hakusan Review of Anthropology MATSUMOTO Seiichi

《Special Theme》The Flow of Goods and People in Imperial Japan:
Memory, Modernity and Periphery

Introduction UENO Hiroko

Articles

Memories Regarding Taiwanese Immigrants in Okinawa: A Comparison between Miyako and Yaeyama MATSUDA Yoshitaka

A Study of Perceptions of Modernization in Supplementary History Readers on Okinawa and Okinawa's Modern Buildings KAMIZURU Hisahiko

Participation of Korean Residents in Japan in International Exchange Project: Focusing on *Chosen Tsushinshi* Parade of Tsushima and Shimonoseki NAKAMURA Yae

On Asia-Pacific Pineapple Industry Transfer beyond Japanese Empire: Focusing on Hawaii, Taiwan and Okinawa YAO Shohei

Special Article

KANO Tadao, the Anthropologist under Imperial Japan: From Taiwan to Southeast Asia CHUN Kyung-soo (KIM Yangsook trans.)

Articles

The Roles of Supplementary Schools for the Chinese Children in Hungary YAMAMOTO Sumiko

The Profit-Seeking and the Cooperative Awareness Shared in the Village: Case Study of Cheese Producers' Practices in Cajamarca, Peru FURUKAWA Yuki

Supplement

Professor Dr. UENO Hiroko's Career and Publications

Hakusan Review of Anthropology

Hakusan Society of Anthropology, Toyo University

白山人類学

HAKUSAN JINRUIGAKU

21号 2018年3月

巻頭言

植野弘子さんと白山人類学研究会 松本誠一

特集論文

《特集》モノと人の移動にみる帝国日本
——記憶・近代・境域——

序 植野弘子

<論文> 松田良孝

沖縄県の台湾系住民をめぐる記憶の連続・断裂・散在
——宮古地方と八重山地方を比較して近代建築物にみる沖縄の近代化認識に関する一試論
——琉球・沖縄史の副読本にみる歴史認識を踏まえて国際交流事業における在日コリアンの参与
——対馬と下関の朝鮮通信使再現行列を中心にパイン産業にみる旧日本帝国圏を越える移動
——ハワイ・台湾・沖縄を中心に

特別寄稿

鹿野忠雄の学問の展開過程から学ぶ「移動」と帝国日本
——台湾から東南アジアまで 全京秀(金良淑訳)

論文

ハンガリーにおける中国系補習校の果たす役割
利益追求と村での協調意識 山本須美子——ペルー、カハマルカ県のチーズ生産者の実践を事例に
古川勇気

付録

植野弘子教授の略歴と研究業績

白山人類学

Hakusan Review of Anthropology

Vol. 21

2018

Hakusan Review of Anthropology

白山人類学研究会

白山人類学

21号

2018年3月

目次

巻頭言

植野弘子さんと白山人類学研究会 松本誠 一…………… 1

特集論文

《特集》モノと人の移動にみる帝国日本
——記憶・近代・境域——

序 植野弘子…………… 5

< 論文 >

沖縄県の台湾系住民をめぐる記憶の連続・断裂・散在
——宮古地方と八重山地方を比較して 松田良孝…………… 15

近代建築物にみる沖縄の近代化認識に関する一試論
——琉球・沖縄史の副読本にみる歴史認識を踏まえて 上水流久彦…………… 37

国際交流事業における在日コリアンの参与
——対馬と下関の朝鮮通信使再現行列を中心に 中村人重…………… 59

パイン産業にみる旧日本帝国圏を越える移動
——ハワイ・台湾・沖縄を中心に 八尾祥平…………… 81

特別寄稿

鹿野忠雄の学問の展開過程から学ぶ「移動」と帝国日本
——台湾から東南アジアまで 全京秀(金良淑訳)…………… 105

論文

ハンガリーにおける中国系補習校の果たす役割
山本須美子…………… 157

利益追求と村での協調意識——ペルー，カハマルカ県の
チーズ生産者の実践を事例に 古川勇氣…………… 175

付録

植野弘子教授の略歴と研究業績 …………… 201

HAKUSAN JINRUIGAKU

Hakusan Review of Anthropology

Vol. 21

March 2018

CONTENTS

MATSUMOTO Seiichi	Preface: Dr. UENO Hiroko and Hakusan Review of Anthropology -----	1
Special Theme: The Flow of Goods and People in Imperial Japan: Memory, Modernity and Periphery		
UENO Hiroko	Introduction -----	5
< Articles >		
MATSUDA Yoshitaka	Memories Regarding Taiwanese Immigrants in Okinawa: A Comparison between Miyako and Yaeyama -----	15
KAMIZURU Hisahiko	A Study of Perceptions of Modernization in Supplementary History Readers on Okinawa and Okinawa's Modern Buildings -----	37
NAKAMURA Yae	Participation of Korean Residents in Japan in International Exchange Project: Focusing on <i>Chosen Tsushinshi</i> Parade of Tsushima and Shimonoseki -----	59
YAO Shohei	On Asia-Pacific Pineapple Industry Transfer beyond Japanese Empire: Focusing on Hawaii, Taiwan and Okinawa -----	81
< Special Article >		
CHUN Kyung-soo (KIM Yangsook trans.)	KANO Tadao, the Anthropologist under Imperial Japan: From Taiwan to Southeast Asia -----	105
< Articles >		
YAMAMOTO Sumiko	The Roles of Supplementary Schools for the Chinese Children in Hungary -----	157
FURUKAWA Yuki	The Profit-Seeking and the Cooperative Awareness Shared in the Village: Case Study of Cheese Producers' Practices in Cajamarca, Peru -----	175
< Supplement >		
	Professor Dr. UENO Hiroko's Career and Publications --	201

《巻頭言》 植野弘子さんと白山人類学研究会

松 本 誠 一*

Preface: Dr. UENO Hiroko and Hakusan Review of Anthropology

MATSUMOTO Seiichi*

1990年9月に発足した白山人類学研究会はやがて30年を迎える。その歴史の中で、2005年4月に植野さんが東洋大学に着任されて以降、本会の活動、とりわけ研究会（講義期間中の月例研究会、年1回のフォーラム）と会誌『白山人類学』の編集・発行について、植野さんがけん引役として調整・推進していただいたことによって、本会は空前の（絶後とは言わない）最盛期を迎えることができたと考えている。もちろん、これは山本須美子・長津一史・箕曲在弘という強力な教授・准教授と、渡邊暁子・水谷裕佳・鈴木佑記・間瀬朋子・寺内大左などの研究能力の高い歴代助教の方たちが、労をいとわず協力してくれたから実現できたことである。

本会の第一期は、1957年から40年間にわたり東洋大学の人類学教育を支えた高橋統一先生の授業に集まっていた大学院生・助手が主導して、若手教員を誘い込んで発足した経緯があるが、主要メンバーが白山を次々と離れることで、動きが弱体化した。高橋統一先生の、大学院博士後期課程を指導する後任として着任された末成道男先生を中心として第二期があり、発行の中断していた『白山人類学』の再開が進められた。そして、第三期を迎えた。

第一期の前半は、人類学専任教員が一人だけであった。第一期の後半1978年から二人、1985年から三人と少しずつ増え、第二期の半ばで、社会文化システム学科が発足し、担当科目は必ずしも「人類学」「文化人類学」ではなくとも、日本文化人類学会会員である教員が、第三期に一層増えたことで、専任教員が本会運営の中心を担うようになってきた変化が、第三期＝最盛期の背景でもある。

会誌の印刷・製本の経費は当初から、関係者の拠出によって賄っている。会費収入内で発行するには、会員数をもっと多くいる。それが、なかなか難しいので、第一期も誰かが負担して、発行の後に売り上げ収入から返済する、高橋先生退職時の寄付金で穴埋めするなどのやりくりで乗り越えてきた。植野編集長期になって、植野さんの印刷経費負担の申し出に甘えることが続いた。最盛期の裏には、こういう支えがあった。文字通りのお陰様である。会

* 東洋大学社会文化システム学科 : Department of Sociocultural Studies, TOYO University, 5-28-20 Hakusan, Bunkyo-ku, Tokyo 112-8606, Japan / matsul1@toyo.jp

としての借金を清算しなくてはならない。

植野さんは、大学教員としての本務である教育・教務、そして研究者としての本務である研究のいずれにも、聞くべき定見をもち、その認識の共有を皆にはかりながら、自ら率先してすべきことを遂行する。学外で学界の委員等も果たしていて、研究会の会務はその余暇の仕事という順になるだろうが、漏れ聞くところでは、しばしば徹夜も辞さない生活スタイルだったという。山積する仕事の合間を縫って、研究会活動の成果を挙げていただいたことに対して、感謝の念は尽きない。

植野弘子さんの活躍している姿を、私が初めて目にしたのは、おそらく1978年春に明治大学の研究会を訪ねた時だった。上野和男先生から、韓国でのフィールドワークを始めた重松真由美さんが一時帰国し、成果報告するという情報を教わって明治大学の研究会を訪ねた。会場にいっぱい参加者が集まっていたが、蒲生正男先生と上野さん、重松さんしか顔と名前が一致しなかった。研究会後に懇親会場の案内だったかを、大声でメリハリよく伝える人がいて、それが植野さんのイメージが強くインプットされた最初だった。私は片道二時間半をかけて茂原から通っていたので、お茶の水界隈での懇親会には参加せず、帰路に就いた。その後、日本民族学会の大会をはじめ各種研究会などで、植野さんが運営を支える仕事に献身している姿をよく目にした。明治以外の諸大学の先生方からも信頼されていることが察せられた。往時を思い出すと、植野さんの他に貢献する姿は一貫している。こういう人と13年間にわたり、学科と研究会で時間を共に過ごせたことは幸運なめぐり合わせであった。

『白山人類学』に投稿された論文の外部査読に関して、植野さんのもつ広い研究者ネットワークを通じて、多数の方に交渉依頼されてきた。匿名であるので、どなたであるか、他の編集委員は全体像を承知していない。したがって、学会でお目にかかることがあっても、それとは知らずに、査読協力いただいたことへのお礼も申し上げないまま過ごしている失礼をここで詫言したい。

植野さんを送ると、その後が続いて、松本、山本さんと定年退職を迎える。白山人類学研究会第四期への移行が始まっている。東洋大学の前身、哲学館の時代には、「日本の人類学の父」と称される坪井正五郎が人類学を担当していた。宮本常一、洪沢敬三に東洋大学は博士学位を授与している。大正13年(1924)に東洋大学文化学科を卒業した関敬吾は、東京学芸大学から東洋大学に移ってきた1966年から、日本民族学会会長を務めた。関が日本民族学会研究大会の白山での開催を引き受けて、「高橋さん、頼むよ」と若手教員だった高橋統一先生と、大学院生だった清水浩昭先生が大会事務局を担って1968年に日本民族学会研究大会が白山で開催された。シンポジウムが中根千枝・蒲生正男の〈日本の親族論〉の学説を闘わせる場となった。それから2018年で50年となる。こういう前史も振り返り、次代の第四期を方向づけていただきたい。

日本文化人類学会から植野さんが、東洋大学で研究大会の開催について打診を受けたが、学部学科の増設と学生数の増加にともない、白山では土曜日も授業が多く入っているため、多数の教室を要する大きな学術集会を、引き受けることができない事情があり、相談の上、お断りした。

植野さんを送る辞を年長の松本が担当することになったのは、東洋大学の定年退職年齢規定の違いによる。定年年齢を引き下げた年を基準として、着任年度がその前か後かの違いにより、植野さんの定年が早くなっているもので、植野さんが松本より年長との誤解がないように、お断りしておく。

松本：《巻頭言》 植野弘子さんと白山人類学研究会

植野弘子教授の略歴と研究業績

略 歴

[学歴]

1976. 3 明治大学第一文学部 史学地理学科 卒業
1977. 4 明治大学大学院 政治経済学研究科 政治学専攻博士前期課程 入学
1980. 3 明治大学大学院 政治経済学研究科 政治学専攻博士前期課程 修了
1981. 4 明治大学大学院 政治経済学研究科 政治学専攻博士後期課程 入学
1987. 3 明治大学大学院 政治経済学研究科 政治学専攻博士後期課程 満期退学
1998. 5 博士（学術） 東京大学
論文題目：台湾漢民族社会における姻戚関係——女性をめぐる連帯と対立に関する分析

[職歴]

1985. 10-1987. 3 日本学術振興会特別研究員
1990. 4 茨城大学教養部 助教授
1996. 4 茨城大学人文学部 助教授
1997. 4 茨城大学大学院人文科学研究科担当
2000. 4 茨城大学人文学部 教授
2005. 4 東洋大学社会学部社会文化システム学科・大学院社会学研究科社会学専攻 教授
2018. 3 東洋大学定年退職

(非常勤講師)

1985. 4 茨城キリスト教短期大学非常勤講師
1987. 4 聖心女子大学非常勤講師
1988. 4 東京都立大学非常勤講師
1988. 4 法政大学非常勤講師
1990. 4 武蔵大学非常勤講師
1991. 4 お茶の水女子大学非常勤講師
1992. 4 弘前大学非常勤講師
2012. 4 慶應義塾大学大学院非常勤講師

2014. 4 成城大学大学院非常勤講師

(共同研究員等)

1990. 4 国立民族学博物館共同研究員 (～ 1991.3)
1991. 4 国立民族学博物館研究協力者 (～ 2000.3)
1992. 4 国立歴史民俗博物館共同研究員 (～ 1995.3)
1992. 4 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員 (～ 1993.3)
1993. 5 文部省内地研究員 (東京大学教養学部 ～ 1994.3)
1997. 4 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究員 (～ 2000.3)
1999. 4 慶應義塾大学地域研究センター客員研究員 (～ 2000.3)
2001. 4 文部科学省在外研究員 (英国・Oxford 大学中国学術研究所 ～ 2001.12)
2009. 4 中華民国・中央研究院台湾史研究所訪問学人 (～ 2010.3)

[学会・社会における活動]

- 1992・1993 年度；2004・2005 年度 日本文化人類学会 (旧日本民族学会) 理事
1999-2007 年度 比較家族史学会理事
2001-2008 年度 日本台湾学会幹事
2003- 現在 南瀛国際人文社会科学研究中心学術委員 (台湾・台南市)
2003.4-2004.3 財団法人交流協会日台交流センター歴史研究者交流事業派遣研究員
2003.8-2005.7 日本学術振興会科学研究費委員会専門委員
2008.2-2009.1 文部科学省科学技術・学術審議会専門委員
2008.12-2009.11 日本学術振興会科学研究費委員会専門委員
2010.4-2016.3 国立民族学博物館運営会議委員
2011- 現在 日本台湾学会理事

著書・論文

[著書]

- 1) 2000. 2.25. 『台湾漢民族の姻戚』 430p. 東京：風響社.
- 2) 2015. 2. 『台湾漢人姻親民族誌』(陳萱訳) 449p. 台北：南天書局 (『台湾漢民族の姻戚』
中文版).

[編著書]

- 1) 1995. 8.20. 『アジア読本・台湾』（笠原政治・植野弘子編）東京：河出書房新社。
（中文訳『台湾讀本』 汪平譯 台北：前衛社 1997年）.
- 2) 2000. 6.10. 『日本の家族における親と娘——日本海沿岸地域における調査研究』（植野弘子・蓼沼康子編）150p. 東京：風響社.
- 3) 2011. 1.31. 『台湾における植民地と経験——日本認識の生成・変容・断絶』（植野弘子・三尾裕子編） 347p. 東京：風響社.
- 4) 2016. 3. 『南瀛歴史，社会與文化IV：社会與生活』（林玉茹・植野弘子・陳恒安主編）318p. 台南市政府文化局.
- 5) 2016. 10.22. 『帝国日本の記憶——台湾・旧南洋群島における外来政権の重層化と脱植民地化』（三尾裕子・遠藤央・植野弘子編）291p. 東京：慶應義塾大学出版会.

[論文]

- 1) 1980. 3. 「南西諸島における家と兄弟姉妹関係——徳之島・与那国島の親族組織をめぐって」（修士論文・明治大学）
- 2) 1981. 2.10. 「南西諸島における姻戚関係」『明治大学大学院紀要』第18集(3)：367-384.
- 3) 1981. 4.15. 「与那国のマチリと神器祭祀」『まつり』37号：82-111.
- 4) 1982. 7.30. 「奄美徳之島の祖霊祭祀——井之川のハマウリとその祭祀集団をめぐって」『社会人類学年報』8：127-147.
- 5) 1983. 2.10. 「台湾漢人社会における母方親族及び姻戚関係に関する諸問題」『明治大学大学院紀要』第20集(3)：127-140.
- 6) 1987. 3.30. 「妻の父と母の兄弟——台湾漢人社会における姻戚関係の展開に関する事例分析」『民族学研究』51巻4号：375-409.
- 7) 1987.12.30. 「台湾漢人社会の位牌婚とその変化——父系イデオロギーと姻戚関係のジレンマ」『民族学研究』52巻3号：221-234.
- 8) 1988. 2.10. 「台湾南部の王醮と村落——台南県一祭祀圏の村落間関係」『文化人類学』5：64-82, 京都：アカデミア出版会.
- 9) 1989. 1.31. 「台湾漢人社会の祖先祭祀——家族と宗族の祭祀をめぐって」『環中国海の民俗と文化・第三巻・祖先祭祀』渡邊欣雄編, pp.95-118, 東京：凱風社.
- 10) 1992. 3.31. 「台湾漢民族の死霊と土地——謝土と地基主をめぐって」『国立歴史民俗博物館研究報告』41：377-411.
- 11) 1993.5.16. 「台湾漢人社会的『後頭厝』與女性」『台湾學術研究会誌』6：165-175.

- 12) 1993.6.25. 「血の靈力——漢民族の生殖観と不浄観」『性の民族誌』須藤健一・杉島敬志編, pp.209-229, 京都: 人文書院.
- 13) 1994.12. 「藏族的婚姻関係と貿易網状関係——予備考察」『中国西南の古代交通与文化』四川大学歴史系編, pp.350-366, 成都: 四川大学.
- 14) 1995. “Daughters and the Natal Family in Taiwan: Affinal Relationships in Chinese Society.” In SUENARI Michio et al.(eds.) *Perspectives on Chinese Society: Views from Japan*. pp.48-66. Canterbury: Centre for Social Anthropology and Computing, Eliot College, University of Kent.
- 15) 1996. 3.25. 「台湾漢民族における屋敷地をめぐる霊と呪術」『家・屋敷地と霊・呪術』長谷川善計ほか編, pp.176-201, 東京: 早稲田大学出版部.
- 16) 1996. 4. 5. 「満族の女性と婚姻をめぐる関係——伝統的慣習と漢化」『満族の家族と社会』愛新覚羅顕琦・江守五夫編, pp.45-93, 東京: 第一書房.
- 17) 1998.5. 「台湾漢民族社会における姻戚関係——女性をめぐる連帯と対立に関する分析」(博士論文・東京大学)
- 18) 1999.2.15. 「台湾漢民族の姻戚関係再考」『中原と周辺——人類学的フィールドからの視点』末成道男編, pp.149-170, 東京: 風響社.
- 19) 1999.2.20. 「移民社会における姻戚関係」『中国東北部朝鮮族の民俗文化』竹田旦編, pp.67-86, 東京: 第一書房.
- 20) 1999. 8.20. 「名前と変化(へんげ)」『妖怪変化 民俗学の冒険③』常光徹編, pp.161-185, 東京: ちくま書房.
- 21) 2000. 7. 5. 「婚出する娘——漢民族の家族研究における一視角」『歴史と民族における結婚と家族』宮良高弘・森謙二編, pp.273-304, 東京: 第一書房.
- 22) 2004. 3. 「植民地台湾における民俗文化の記述」『人文学科論集』(茨城大学人文学部) 41:39-57.
- 23) 2005. 3. 「植民地台湾の日常生活における「日本」に関する試論——女性とその教育をめぐる」『人文学科論集』(茨城大学人文学部) 43:1-17.
- 24) 2006. 3.20. 「植民地台湾における高等女学校生の「日本」——生活文化の変容に関する試論」『戦後台湾における<日本>——植民地経験の連続・変貌・利用』五十嵐真子・三尾裕子編, pp.121-154, 東京: 風響社.
- 25) 2008. 2.28. 「台湾における名前の日本化——日本統治下の「改姓名」と「内地式命名」」『東洋大学アジア文化研究所研究年報』42:97-108.
- 26) 2008. 4. 「台南文化上所受之日本統治的影響——研究高等女学校教育對台湾生活文化之意義」(吳得智訳)『南瀛歴史, 社会與文化』林玉茹・Fiorella Allio (艾茉莉)

主編, pp.409-429, 台南: 台南縣政府.

- 27) 2010. 6. 「日本統治時期台南之高等女学校生: 従生命史觀察「日本」経験與伝統習俗」(陳萱訳), 『南瀛歴史, 社会與文化Ⅱ』戴文鋒主編, pp.143-147, 台南: 台南縣政府.
- 28) 2011. 1.31. 「台湾の日常と「日本教育」——高等女学校生の家庭から」『台湾における<植民地>経験——日本認識の生成・変容・断絶』植野弘子・三尾裕子編, pp.141-184, 東京: 風響社.
- 29) 2011. 3.31. 「父系社会を生きる娘——台湾漢民族社会における家庭生活とその変化をめぐって」『文化人類学』75-4:526-550.
- 30) 2012. 12. 「『民俗台湾』にみる日本と台湾の民俗研究——調査方法の検討を通じて」, 『東洋大学社会学部紀要』50(1): 99-112.
- 31) 2016. 9.28. 「婚出女性がつなぐ「家」——台湾漢民族社会における姉妹と娘の役割」『家と共同性』加藤彰彦・戸石七生・林研三編, pp.233-254, 東京: 日本経済評論社.
- 32) 2016. 10.22 「植民地台湾の生活世界の「日本化」とその後——旧南洋群島を視野にいれて」『帝国の記憶——台湾・旧南洋群島における外来政権の重層化と脱植民地化』三尾裕子・遠藤央・植野弘子編, pp.145-181, 東京: 慶應義塾大学出版会.

[その他]

- 1) 1980. 3.10. 「社会関係の諸形態」pp.49-70, 「年中儀礼」pp.82-90. (植松明石と共著)『与那国の文化——沖縄最西端与那国島における伝統文化と外来文化: 周辺諸文化との比較研究』渡邊欣雄・植松明石編, 与那国研究会.
- 2) 1987. 7.20. 「台湾漢人家族の女性に関する覚書——「妻」と「姉妹」の二面性」『ふいんど』(明治大学社会人類学研究会) 第2号: 51-56.
- 3) 1987. 8.10. 「日本は母系制か双系制か」『日本女性史』脇田晴子ほか編, pp.9-14, 東京: 吉川弘文館.
- 4) 1992. 5.20. 「満族のアイデンティティ」『ふいんど』(ふいんど社会人類学研究会) 第5号: 41-43.
- 5) 1992. 5. 「遼寧省の満族と満族研究」『満学協会会報』平成4年春号: 13-17.
- 6) 1993. 1.20. 「個人・家族・社会」『文化人類学』波平恵美子編, pp.34-66, 東京: 医学書院.
- 7) 1994. 3. 『日本の家族における既婚女性の娘としての意味——親と娘に関する文化人類学的研究』平成5年度科学研究費補助金(一般研究C)研究成果報告書,

42p.

- 8) 1994. 12. 1. 「フィールドワークでみえた日本」『茨城大学教養部報』64：3-4.
- 9) 1995. 8.20. 「鬼月——年中行事」『アジア読本・台湾』笠原政治・植野弘子編, pp.126-132, 東京：河出書房新社.
- 10) 1995. 8.20. 「息子と娘の親孝行——漢民族の家族」『アジア読本・台湾』笠原政治・植野弘子編, pp.102-109, 東京：河出書房新社.
- 11) 1995. 8.20. 「死んでもお嫁に——位牌の結婚」『アジア読本・台湾』笠原政治・植野弘子編, pp.133-139, 東京：河出書房新社.
- 12) 1996. 3.31. 「チベット・ラサ市近郊の民家」(朝野洋一と共著)『茨城大学教養部紀要』30号：267-279.
- 13) 1996. 6.15. 「近い異文化の研究——台湾漢民族社会のフィールドワーク」『フィールドワークを歩く——文科系研究者の知識と経験』須藤健一編, pp.199-206, 京都：嵯峨野書院.
- 14) 1997. 7.31. 「台湾における死者祭祀と喪服」『家族と死者祭祀』孝本貢・八木透編, pp.223-228, 東京：早稲田大学出版部.
- 15) 2002. 1. 6. 「人と人とのつながり」『文化人類学 第2版』波平恵美子編, pp.38-74, 東京：医学書院.
- 16) 2009. 11.10. 「イエと家族」『図説 日本民俗学』福田アジオ・古家信平・上野和男・倉石忠彦・高桑守史編, pp.54-63, 東京：吉川弘文館.
- 17) 2011. 3.31. 「特集 台湾をめぐる境域 序」『白山人類学』14：1-6.
- 18) 2016. 3. 「導論：南瀛地区的社会生活」(林玉茹と共著)『南瀛歴史, 社会與文化IV：社会與生活』林玉茹・植野弘子・陳恒安主編, pp.vi-xvi, 台南市政府文化局.

【翻訳】

- 1) 1993. 6.10. 烏丙安著「中国北方諸民族の通婚慣習」『日本の家族と北方文化』江守五夫他, pp.157-190, 東京：第一書房.
- 2) 1994. 9.15. エミリー・エイハン著「台湾村落における墓の風水」(宮原暁と共訳)
(AHERN, Emily, "Geomancy of Grave." In *The Cult of the Dead in a Chinese Village.*)
- 3) 1999. 2.20. 江帆著「女性の民間信仰とその変遷」『中国東北部朝鮮族の民俗文化』竹田旦編, pp.291-314, 東京：第一書房.
- 4) 1999. 2.20. 烏丙安著「風水と占卜の源流と現状」『中国東北部朝鮮族の民俗文化』竹田旦編, pp.357-374, 東京：第一書房.

[書評]

- 1) 1988. 5.31. 「比嘉政夫著 『女性優位と男系原理——沖縄の民俗社会構造』 『日本民俗学』 第174号 : 167-175.
- 2) 1989. 8. 1. 「WATSON, Rubie S., *Inequality among Brothers: Class and Kinship in South China.*」 『ふいんど』 (明治大学社会人類学研究会) 第3号 : 48-52.
- 3) 1990. 12.25. 「和田正平著 『性と結婚の民族学』 『比較家族史年報』 5 : 121-124.
- 4) 1993. 12.30. 「村武精一著 『家と女性の民俗誌』 『民族学研究』 58巻3号 : 288-230.
- 5) 1998. 7.25. 「上野輝将など著 『性を考える』 わたしたちの講義』 『女性史学』 第8号 : 114-119.
- 6) 2005. 12.31. 「山路勝彦著 『台湾の植民地統治——<無主の野蛮人>という言説の展開』 『文化人類学』 70巻3号 : 426-429.

[事典]

- 1) 1986. 9.10. 「正月 [中国]」 『日本大百科全書』 11, p.818, 東京 : 小学館.
- 2) 1987. 11. 1. 「年中行事 [中国]」 『日本大百科全書』 18, pp.313-314, 東京 : 小学館.
- 3) 1996. 2.28. 「持参財産」 pp.393-394. 「売買婚」 p.682. 「有償婚」 pp.815-816. 「養子の歴史 (東アジア)」 pp.822-823. 「幼児婚 / 幼児婚約」 pp.834-835. 「労役婚」 pp.873-874. 『事典家族』 東京 : 弘文堂.
- 4) 1999. 10.1. 「イトコ婚」 上巻 pp.112-113. 「婚姻規制」 上巻, p.660 『日本民俗大辞典』 東京 : 吉川弘文館.
- 5) 2004. 12.15. 「植野弘子著 『台湾漢民族の姻戚』 『文化人類学文献事典』 p.340, 東京 : 弘文堂.

白山人類学研究会

白山人類学研究会は、東洋大学社会学部社会文化システム学科の教員を世話人として組織されている。定例研究会は、原則として毎月第3または第4月曜日、東洋大学8号館で開催される。また、2007年度からは年次フォーラムを開催している。8～9月は夏休み、2～3月は春休みとし、研究会は開催しない。研究会の案内は電子メールを通じておこなっている。連絡先：研究会事務局 hakusanjinrui@gmail.com

白山人類学研究会 2017年度の活動

□ 2017年4月17日第1回研究会

演題：オーラルからモーラルへ——ニジュール西部の人と土地をめぐる社会関係

発表者：佐久間 寛（東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所）

要旨：神話や民話、歌や呪文、あるいは儀礼の説明や出来事についての証言など、主題や形式がなんであれ、フィールドの当事者から得られる語りとは、人類学者にとって、他の何物にも代えがたい価値をもっている。しかし、そうしたオーラルな次元に気をとられるあまり、見落とされる（聞き落とされる？）傾向にあった事柄があると発表者は考えている。本発表ではニジュール西部農村地帯における人と土地の社会関係を主題に、明示的な語りに潜む暗黙の葛藤や、そうした葛藤を個の内にもたらず集合的な規範や倫理、つまりモーラルな次元へのアプローチを試みた。

□ 2017年5月15日第2回研究会

演題：ボルネオ島焼畑民の生活世界から見たアブラヤシ農園開発

発表者：寺内 大左（東洋大学社会学部）

要旨：カリマンタン（ボルネオ島インドネシア領）には豊かな熱帯林が現存し、そこでは焼畑先住民が熱帯林を利用しながら生活を営んできた。しかし、2000年以降、熱帯林を皆伐するアブラヤシ農園開発が、企業によって急速に進められている。これまでの研究はアブラヤシ農園開発の経済性や環境・社会へのインパクトを検討し、その是非を議論してきた。しかし、アブラヤシ農園開発に直面する焼畑先住民の開発に対する認識や対応、そのような認識と対応の背後にある生活基盤を明らかにする研究はあまり行われてこなかった。そこで本発表では以上の課題にこたえる形で、焼畑先住民の生活世界からアブラヤシ農園開発の意味を問い直すことを試みた。

□ 2017 年 6 月 19 日第 3 回研究会

演題：シンガポールのヘリテージ・ツーリズムとエスニック・アイデンティティ——プラナカン文化の表象と消費をめぐって

発表者：平島（奥村） みさ（東洋大学社会学部）

要旨：シンガポールでは近年、文化遺産政策と並行してヘリテージ・ツーリズムが発展している。本報告ではその中でもプラナカン文化について取り上げた。プラナカン文化は 19 世紀から 20 世紀初頭に頂点を極め、第二次大戦後急速に衰退したが、再び脚光を浴びている。プラナカン文化復興・継承活動が盛んになる一方、コマーシャルイズムの波に消費され、文化的正統性を損なう懸念も出てきた。また、このような「第 4 の文化」が内外に認知されることで、シンガポール多民族社会の在り方にも変化が生じている。本報告を通して、ポスト・リ・クアンユー時代に入ったシンガポールの新しい文化状況についても分析を試みた。

□ 2017 年 7 月 17 日第 4 回研究会

演題：フィリピン系ニューカマー二世世代のエスニックアイデンティティと学業達成

発表者：三浦 綾希子（中京大学国際教養学部）

要旨：ニューカマーと呼ばれる新来外国人が増加してから 30 年以上が経過した現在、ニューカマー二世世代は学校経験が注目される学齢期から青年期、壮年期へと移行しつつある。海外の移民研究では、親の人的資本や家族構造、ホスト社会の編入様式によって二世世代のエスニックアイデンティティや学業達成は分岐していくことが指摘されているが、日本のニューカマーの場合、同様の分岐は見られるのだろうか。また見られるのだとすれば、そこにはどのような要因が関わっているのだろうか。本報告では、ニューカマー二世世代の若者たちのエスニックアイデンティティと学業達成についてフィリピン系を事例に検討した。

□ 2017 年 10 月 16 日第 5 回研究会

演題：生活の「延長線上にある」チーズ経営——ペルー、カハマルカ県の山村における経済活動を事例に

発表者：古川 勇氣（東京大学大学院総合文化研究科）

要旨：従来的人类学的研究では、市場交換と「社会に埋め込まれた」経済は重なり合うものとされてきた。本発表はその指摘を援用するかたちで、互酬交換と市場での利益追求との相互関係を利益のゆくえの視点から明らかにした。利益のゆくえの視点とは、農村において利益追求をおこなう場合、既存の社会関係による互酬交換や再分配に阻まれることなく、利益が追求されるか、否かという分析視点である。南米ペルー、カハマルカ県の山村においてチーズ生産者たちは周辺農民からの生乳回収を基盤として経営を維持している。彼らと農民との

関係は日常の挨拶やモノの交換にはじまり、金銭の貸し借りに及ぶまでの様々な互酬交換によって成り立っている。彼らは、時には貸し越しになる互酬交換や惜しまなく労働力を提供することで山村の祭りを主催する。彼らは単純に損得だけを計算した経営をおこなっているのではなく、常に周辺農民に気を配りながら、時には気前の良さを示して経営をおこなっている。その寛大さが潤滑油となることで周辺の妬みに阻まれることなく、市場での利益追求が実現されていることを明らかにした。

□ 2017年12月18日第6回研究会

演題：カンボジア北東部のラオ村落における対人関係をめぐるやりすごし

発表者：山崎 寿美子（愛国学園大学）

要旨：本発表では、カンボジア北東部ストントラエン州のラオ村落における対人関係に着目し、日常的に起こるもめごとに、人びとがどのように対応するのかについて、事例をあげて検討した。東南アジアの社会論で従来から盛んに議論がなされてきたように、調査地においても、対人関係は基本的に、親密な二者関係の網目で成り立っている。そうした親密な間柄は、家を訪問しあったり食物や労働を交換するといった、直接的なやりとりによって築かれる。しかし、親密な間柄であっても、日常においては、些細なものも含めてしばしばもめごとが起こる。その際、人びとは暴力や口論など、相手と対面する方法を極力回避し、交換を停止して、問題の核心に触れないようにして過ごす。親密な間柄が直接的な行為によって築かれるのとは対照的に、もめごとにあたっては、人びとはひたすら間接的になる傾向がみられる。本発表では、こうした状況で人びとが言及する、「だんまり」で「ただただいるだけ」という、いわばやりすごしの姿勢に光をあて、それがラオの対人関係においてどのような意味をもっているのかについて考察した。

□ 2017年11月11日第10回研究フォーラム

「モノと人の移動にみる帝国日本——記憶・近代・境域」

企画者：植野 弘子（東洋大学社会学部）

趣旨：日本が「帝国」であった時代、日本と植民地となった地域の間で、また植民地と植民地の間で、帝国の支配がなされているがゆえの、それまでにないモノと人の移動がなされた。こうした移動に伴い、いかなる他者像が生み出され、それは現在の我々の他者へのイメージといかにつながっているか。この課題に対して、特に、記憶の構築、近代への評価、さらに境域における特性に注目して、論議を行った。

プログラム :

- 13:00 ~ 13:10 趣旨説明 植野 弘子 (東洋大学)
- 13:10 ~ 13:55 「近代建築物にみる沖縄の「近代化」認識に関する一試論」
報 告 者 : 上水流 久彦 (県立広島大学)
コメンテーター : 泉水 英計 (神奈川大学)
- 13:55 ~ 14:40 「交錯する記憶——朝鮮半島をめぐる植民という日常」
報 告 者 : 鈴木 文子 (佛教大学)
コメンテーター : 三尾 裕子 (慶應義塾大学)
- 14:50 ~ 15:35 「沖縄県の台湾系住民をめぐる記憶の連続・断裂・散在——宮古地方と八重山地方を比較して」
報 告 者 : 松田 良孝 (フリー・ジャーナリスト)
コメンテーター : 笠原 政治 (横浜国立大学)
- 15:35 ~ 16:20 「国際交流事業における在日コリアンの参与——対馬と下関の朝鮮通信使再現行列を中心に」
報 告 者 : 中村 八重 (韓国外国語大学)
コメンテーター : 井出 弘毅 (東洋大学)
- 16:30 ~ 17:15 「パイン産業にみる旧日本帝国圏を越える移動——ハワイ・台湾・沖縄を中心に」
報 告 者 : 八尾 祥平 (神奈川大学)
コメンテーター : 箕曲 在弘 (東洋大学)
- 17:20 ~ 18:10 総合討論

『白山人類学』投稿規定

1 本誌の名称および目的

本誌は、日本語名を『白山人類学』、英語名を *Hakusan Review of Anthropology* と称し、白山人類学研究会の会誌として、会員による研究成果の発表およびこれに関連する情報・資料を提供するものである。本誌は年1回3月に刊行される。

2 投稿資格

投稿は原則として本会会員に限る。ただし、編集委員は非会員に対しても寄稿を依頼することがある。

3 掲載原稿

原稿は、広義の人類学的な視点に立った研究成果を中心とする。その種類は、原則として以下のように区分する。

- a. 論文（研究成果の発表）
- b. 研究ノート（試論的な報告）
- c. 翻訳（日本語以外の言語による論文の日本語訳）
- d. 資料（フィールドワーク等に基づく一次資料、原典史料の提供）
- e. 書評（新刊書の書評）
- f. 資料紹介・研究活動紹介（公開資料や研究活動、学術集会などの紹介）
- g. フィールド通信（フィールドワークの記録や短報）

a-cは400字詰め横書き原稿用紙で概ね60枚以内、dは30枚以内、e-gは15枚以内とする。いずれも未発表のものに限る。原稿には論文タイトル、投稿者の氏名、所属機関、所属機関、連絡先（電子メールアドレス）、英語タイトル、ローマ字氏名、所属の英語名を付記すること。aおよびbには、200-500語程度の英文要旨、日本語および英語のキーワードをつける。

4 原稿の作成・投稿の手続き

- (1) 原稿の作成にあたっては、本誌の執筆要項に従うこと。
- (2) 使用言語は日本語または英語に限る。日本語については、できるだけ常用漢字・新かなづかいを使用する（英語論文の執筆要領等については、編集委員に相談すること）。
- (3) 原稿は原則としてMSワードで作成し、電子メールに添付して編集委員に送付する。あるいはUSBメモリ等の電子媒体に保存の上、編集委員に郵送する。電子メールの本文または郵送の場合は別紙に、使用ソフトのバージョン等を明記すること。
- (4) 日本語タイトル、執筆者の氏名、連絡先、使用ソフトのバージョン等を本誌巻末掲載の「投稿票」の様式に従って記入し、原稿とは別の「投稿票」ファイルとして電子メールに添付して編集委員に送付する。原稿郵送の場合は、プリントアウトしたものを原稿に同封すること。投稿票は、白山人類学研究会ウェブサイト（下記8「原稿の送付先・問合せ先」参照）からダウンロードすることもできる。

- (5) 電子メールによる送付、郵送、いずれによる投稿の場合も、編集委員は電子メールで受領確認を投稿者に送付する。投稿後の一定期間、編集委員から連絡がない場合は、添付なしの電子メールか電話で編集委員に問い合わせること。
- (6) ウィンドウズ標準フォントに存在しない特殊文字、または制御記号や文字飾りを使用する場合は、投稿時に編集委員に相談すること。
- (7) 図、表、写真は、原則として原稿本体とは別に準備し、「図」、「表」、「写真」等の名のファイルにまとめること。送付方法は原稿の場合と同じ。原稿採用後、編集委員が図、表、写真のレイアウトや提出方法を別途指示することもある。
- (8) 郵送された原稿（図、表、写真を含む）および電子媒体は、本誌への採否に関わらず投稿者に返却しない。刊行後しばらく保管した後、編集委員で処分する。
- (9) 各号の投稿締切日は毎年11月30日とする。

5 原稿の採否・最終原稿の提出手続き

- (1) 論文・研究ノートの採否ならびにその区分については、投稿、依頼を問わず、本誌の査読規定に従うものとし、原則として2名の査読者（レフェリー）による査読の上、編集委員が決定する。原稿採用の条件として原稿の修正を求める場合がある。
- (2) 著者による校正は、原則として初校のみとする。誤字・脱字と誤植以外の変更は、必要最低限にとどめる。加筆および訂正が必要以上に多い場合は、採用を取り消すこともある。

6 原稿料の支払い等

- (1) 原稿料の支払いはしない。
- (2) 抜き刷りは、著者負担で作成することとする。

7 著作権

採用原稿については、著作権のうち、複製権、翻訳・翻案権、公衆送信・伝達権（いずれも電子形態による場合を含む）を白山人類学研究会代表に譲渡することとする。

8 原稿の送付先・問合せ先（2018年度）

〒112-8606 東京都文京区白山5-28-20

『白山人類学』編集委員

東洋大学社会学部 山本須美子（編集委員長） 長津一史

E-mail: yamanoto-s@toyo.jp/ nagatsu@toyo.jp

* 電子メールに添付して原稿を送付する場合は、かならず双方あてに送信すること。

白山人類学研究会ウェブサイト：<http://hakusan-jinruigaku.toyo.ac.jp>

9 本規定の改廃

本規定の改廃は、白山人類学研究会運営委員の承認によっておこなう。

10 附則

本規定は、2018年4月1日から施行する。

『白山人類学』執筆要領

はじめに

本誌の表記と体裁を統一し、多くの読者に読みやすいものとするため、この執筆要領にしたがってご執筆ください。執筆要領の内容は主として論文および研究ノートの作成を念頭においていますが、その他の原稿を作成する場合も、原則としてこの執筆要領に準拠してください。

1 原稿の形態

- 1-1 原稿は原則としてMSワードで作成し、電子メールに添付して編集委員に送付する。
- 1-2 ウィンドウズ標準フォントに存在しない特殊文字、または制御記号や文字飾りを使用する場合は、投稿時に編集委員に相談すること。
- 1-3 図、表、写真は、原則として原稿本体とは別に準備し、「図」、「表」、「写真」等の名のファイルにまとめること。
- 1-4 投稿原稿のMSワードの設定は、A4版、横書き、余白：上下左右30mm、一行の文字数：38字、行数：40行、行間：1行、フォントサイズ：11ポイント、用紙の端からの距離：ヘッダー・フッターともに15mmとすること。
- 1-5 日本語は、章の表題、節の表題については全角MSゴシック、本文および脚注文については全角MS明朝を使用する。
- 1-6 ローマ字アルファベットおよび数字は、原則としてすべて半角centuryを使用する。
- 1-7 英文要旨については、原則として英文校閲の専門家による校閲を受けたものを提出すること。なお、編集委員が別途、英文校閲の専門家に依頼して、言語的修正をおこなうこともある。

2 論文の構成

- 2-1 原稿は以下のような構成とする。ただし、翻訳、資料、書評、資料紹介・研究活動紹介、フィールド通信には、キーワードおよび英文要旨を付さない。翻訳の原文が英語の場合は、英語タイトルを重ねて記す必要はないが、原文が英語以外の場合は原文タイトルの英語訳を記す。

- (1) 日本語タイトル
- (2) 日本語氏名
- (3) 日本語所属（**大学**研究科等）
- (4) 電子メールアドレス
- (5) 英語タイトル

* 英語タイトルについては編集委員の責任で変更を加えることがある。

- (6) ローマ字氏名
- (7) 所属の英語名

* なお、最終原稿において所属は、氏名の末尾に上付きアスタリスク（*、日本語氏名末は全角MS明朝、英語氏名末には半角century）を付して、脚注ブロックにアスタリスク（半角century）を入れ、半角スペースをあけて、所属のみを日本語

で、続けて全角セミコロン (;) の後に、所属・住所 / 電子メールアドレスを英語で記す。

例：

* 東洋大学社会学部 ; Faculty of Sociology, Toyo University, 5-28-20, Hakusan,
Bunkyo, Tokyo, 112-8606/ hakusantarou@toyo.jp

- (8) 英文要旨 (200-400 語程度)
- (9) 日本語キーワード (5 語前後)
- (10) 英語キーワード (5 語前後)
- (11) 本文
- (12) 注

* 脚注方式とし、各ページの下部に示す。

- (13) 謝辞 (必要な場合)
- (14) 参考文献 (見出しは「参考文献」とする。参考文献, 引用文献等としない)
- (15) 図, 表, 写真は、原則として原稿本体とは別に準備し、そのファイルを保存した電子媒体とあわせて、プリントアウトしたものを編集委員会に郵送する。本文中に挿入箇所を示しておくこと。図, 表, 写真についても、電子ファイルの形式は、原則として MS ワードによるものとする。他のファイル形式で提出する場合は、投稿時に編集委員に相談すること。原稿採用後の図, 表, 写真の提出方法については、編集委員が別途指示する。

2-2 章・節等の表記は、以下のとおりとする。

- (1) 章番号は、半角ローマ数字 (I, II..., フォントは century) で示す。
- (2) 節番号は、半角アラビア数字 (1, 2..., フォントは century) で示す。
- (3) 節以下を細分する場合には、(1) / 1-1 / 1.1, (2) / 1-2 / 1.2...などを適宜用いる (書式は統一すること)。
- (4) 章, 節には数字だけではなく必ず表題をつける。
- (5) 章のローマ数字は、全角特殊文字 (I, III, IVなど) を用いず、必ず半角 century (I, III, IV など) で入力すること。II, IV, IXなどは、I, V, Xなどの組み合わせで入力する (例: IVは“ I ”と“ V ”を組み合わせる)。
- (6) 章と節の数字の後ろに点はつけず、半角 2 文字分のスペースを入れて表題を記す。
- (7) 章見出しの前と後ろの行にはそれぞれ 1 行分の空行を、節以下の見出しの前の行には 1 行分の空行を入れること。

3 日本語文章の表現

- 3-1 本論では、現代かなづかい (ただし引用文は原文どおり) を用いる。
- 3-2 字は新字体を用い、難しい漢字はなるべく避ける。
- 3-3 接続詞, 副詞, 助動詞, 代名詞はなるべくかな書きにする。
例: 所謂 → いわゆる 丁度 → ちょうど 又 → また, 但し → ただし
- 3-4 繰り返しの記号のうち、かな文字の反復記号 (ゝ等) は避け、漢字の反復記号 (々) は用いる。
例: あゝ → ああ 人人 → 人々
- 3-5 句点はマル (。), 読点はカンマ (,) を用いる。いずれも全角にすること。

- 3-6 漢字名以外の外国の人名・地名等はカタカナで表記する。必要に応じ、初出時にマル括弧内に原綴りを記す。
例：ギアツ (Clifford Geertz), サンダカン (Sandakan)
- 3-7 和文にかかる括弧 (マル括弧, 大括弧, キッコウ括弧等) は, 原則としてすべて全角とする。
- 3-8 パソコンの機種依存文字は文字化けの原因になるので, できるだけ使用しない。たとえば, ①は (1), Ⅲは III とする。
- 3-9 名詞を並列する場合は, 全角カンマ (,) , ナカグロ (・) を適宜, 用いる。
- 3-10 引用文は前後にカギ括弧「」をつける。ただし, 引用が比較的長いときには, 改行してブロックとする。引用ブロックは左側全体を2文字インデントし, さらにその1行目を1字下げる。前後のカギ括弧「」はつけない。引用ブロックと前後の本文との間には1行分の空行を入れる。引用の直後に文献を指示する。引用文中の引用者補記は, キッコウ括弧〔〕に入れる。

4 数字・年号

- 4-1 数字は, 数値の表現には半角アラビア数字, 概念の表現には漢数字を使用する。適宜, 桁を区切る半角カンマ (,) を入れる。
例：1990年, 3,120人, 一流, 第二次世界大戦
- 4-2 分数は, 3分の1, 20分の7のように示す。パーセントは% (半角 century) とする。
- 4-3 数の幅は半角ハイフン (-) を用いる。
例：3-6人, 1880-90年
- 4-4 メートル, トン等の数値単位はカタカナ書きとする。
- 4-5 年号には原則として西暦を用い, 必要に応じて日本の元号, 中国暦, 朝鮮暦, ジャワ暦, イスラーム暦などを併記する。
- 4-5 図, 表は横書きを原則とする。番号および表題は, 図/表, 図/表番号 (半角数字), 半角スペース2文字, 表題の順で記す。
例：図1 魚醬の分布

5 参考文献

論文を書くために参照した文献ならびに引用した文献については, 以下のように表記する。注をたてて表記することはしない。

- 5-1 文中の引用表記 (以下の“=”は, 実際には表記しない)
- (1) 全角大 (始) = 著者名 (ファミリーネームのみ) = 半角スペース = 刊行年 = 半角コロンの半角スペース = 参照/引用したページ数の範囲 = 全角大括弧 (終) とする (日本語文献, 英語等の文献いずれも同じ)。句読点は全角大括弧 (終) の後に置く。
例：
…である [末成 1999: 387-389]。…といわれている [Watson 1985: 593-594]。
- (2) 論文集を参照/引用した場合は, (1)の様式で著者名にかえて編者名を次のように記載する。日本語の文献であれば, 編者名の後に「編」を付す。英語等の文献で編者が一人であれば, 著者名の後に“ed.” (または ed. に相当する当該言語の単語/略語), 編者が二人以上であれば“eds.” (または eds. に相当する当該言語の単語/略語) を付す。

例：

[加藤編 2004] / [植野・蓼沼編 2000]

[Hefner ed. 2002] / [Hefner and Horvatic eds. 1997]

- (3) 編著者が複数の文献を参照／引用した場合は、編著者名を次のように記載する。日本語文献については、ファミリーネームをナカグロでつなぐ。英語等の文献については、編著者が2人であれば、編著者のファミリーネームを“and”（またはandに相当する当該言語の単語）でつなぐ。編著者が3人以上であれば、編著者のファミリーネームを全角スラッシュでつなぎ、最後の編著者のファミリーネームのみ“and”でつなぐ。“&”は使用しない。
- (4) 同じ文献の異なる箇所を表記する場合は、半角カンマ（,）で参照箇所を分ける。

例：

[末成 1999: 387-389, 404]

- (5) 異なる文献を同時に表記する場合は半角セミコロン（;）を用いる。

例：

[末成 1999: 387-389; 2005: 107; 山本 2005: 12]

- (6) ウェブサイト（オンライン）の資料・論文等を参照／引用した場合は、まず上記の文献の場合の記載方法に従って著者名、編著者名、またはサイトの管理運営組織名を記し、その後に、日本語サイトの場合は「(オンライン)」を、英語等外国語のサイトの場合は“(online)”を付し、半角スペースの後、記事執筆年（もしくはデータの公開年）を記す。

例：

[外務省（オンライン）2014] / [Department of Statistics, Malaysia (online) 2014]

- (7) *ibid*, *op. cit*, 前掲書などの表記は用いない。

5-2 参考文献一覧

- (1) 参考文献一覧は、本文または謝辞の後に「参考文献」として記す。記載するのは、本文や注で引用したものに限る。著者名のローマ字アルファベット順または50音（あいうえお）順で記載する。同一著者に複数の文献がある場合には、出版年順で文献を記す。同一著者に出版年が同じ文献が複数ある場合には1987a, 1987bなどとして区別する。参照・引用したウェブサイトについては、一覧表の最後に[ウェブサイト]といれ、その下部に別に記載する。
- (2) 複数の編著者の日本語文献を記す場合は、植野弘子・蓼沼康子（編）のように、編著者名をナカグロでつなぐ。ただし、カタカタ書きの外国人名を含む場合には、吉原和男／クネヒト・ペトロ（編）のように、ナカグロに代えて全角のスラッシュを用いる。
- (3) 複数の編著者の欧米語文献を記す場合、第1編著者については、氏名を倒置させてラスト・ネーム、ファースト・ネームの順とするが、第2編著者以降については、氏名を倒置させない（ただし本文中の引用では、編著者のすべてについてファミリーネームのみを記す）。編著者が2人の場合、編著者名は“and”（またはandに相当する当該言語の単語）でつなぐ。編著者が3人以上の場合は、編著者名は全角スラッシュでつなぎ、最後の編著者名のみ“and”でつなぐ。“&”は使用しない。
- (4) 日本語・欧米語以外の文献の記載法は、欧米語文献の例に準ずるが、著者名のファー

スト・ネーム, ラスト・ネームなどの配列は各言語の慣例に従う。

- (5) 雑誌名は原則として略語ではなく全て表記する。煩雑さを避けるために略語を使う場合は、略語一覧を参考文献表の冒頭に記す。
- (6) 副題は、原典の形式に関わらず、日本語文献の場合は全角ダッシュ二つ (——), ローマ字アルファベット使用言語の文献の場合は半角コロン (:) で示す。

5-3 参考文献表の表記

(1) 雑誌論文の場合

〔日本語〕 著者名 (改行) = 発行年 = 半角スペース 2 文字 = 「論文タイトル」 = 『雑誌名』 = 巻 = 半角マル括弧 (始) = 号 = 半角マル括弧 (終) = 半角コロン = 半角スペース = 掲載ページ範囲 = 全角ピリオド

〔英語等〕 著者名 (改行) = 発行年 = 半角スペース 2 文字 = 論文タイトル = 半角カンマ = 半角スペース = イタリアック雑誌名 = 半角スペース = 巻 = 半角マル括弧 (始) = 号 = 半角マル括弧 (終) = 半角コロン = 半角スペース = 掲載ページ範囲 = 半角ピリオド

例:

松村圭一郎

2007 「所有と分配の力学——エチオピア西南部・農村社会の事例から」『文化人類学』72(2): 141-164.

Bird-David, Nurit.

1990 The Giving Environment: Another Perspective on the Economic System of Gatherer-Hunters, *Current Anthropology* 31(2): 189-196.

(2) 論文集に掲載されている論文の場合

〔日本語〕 著者名 (改行) = 発行年 = 半角スペース 2 文字 = 「論文タイトル」 = 『論文集名』 = 編者名 = 全角マル括弧 (始) = 編 = 全角マル括弧 (終) = 全角カンマ = 所収ページ範囲 = ページ = 全角カンマ = 発行地名 = 半角コロン = 半角スペース = 出版社 = 全角ピリオド

〔英語等〕 著者名 (改行) = 発行年 = 半角スペース 2 文字 = 論文タイトル = 半角カンマ = In = イタリアック論文集名 = 半角カンマ = edited by = 編者名 = 半角カンマ = pp. = 半角スペース = 所収ページ範囲 = 半角カンマ = 発行地名 = 半角コロン = 半角スペース = 出版社 = 半角ピリオド

例:

末成道男

1999 「ベトナムから見た漢族家族の特徴」『中原と周辺——人類学的フィールドワークからの視点』末成道男 (編), 387-408 ページ, 東京: 風響社.

Watson, James L.

1986 Anthropological Overview: The Development of Chinese Descent Group, In *Kinship Organization in Late Imperial and Modern China, 1000-1940*, edited by Ebrey, Patricia Buckley and James L. Watson, pp. 274-292, Berkeley: University of California Press.

(3) 単行本の場合

〔日本語〕 著者名（改行）＝発行年＝半角スペース 2 文字＝『書名』＝発行地名＝半角コロン＝半角スペース＝出版社＝全角ピリオド

〔英語等〕 著者名（改行）＝発行年＝半角スペース 2 文字＝イタリック書名＝半角カンマ＝発行地名＝半角コロン＝半角スペース＝出版社＝半角ピリオド

例：

末成道男

1983 『台湾アミ族の社会組織と変化——ムコ入り婚からヨメ入婚へ』 東京：東京大学出版会.

Freedman, Maurice

1958 *Lineage Organization in Southeastern China*, London: The Athlone Press.

(4) 論文集の場合

〔日本語〕 編者名＝全角マル括弧（始）＝編＝全角マル括弧（始）（改行）＝発行年＝半角スペース 2 文字＝『書名』＝発行地名＝半角コロン＝半角スペース＝出版社＝全角ピリオド

〔英語等〕 編者名＝半角マル括弧（始）＝ed（編者が一人）／eds（編者が二人以上）＝半角ピリオド＝半角マル括弧（終）（改行）＝発行年＝半角スペース 2 文字＝イタリック書名＝半角カンマ＝発行地名＝半角コロン＝半角スペース＝出版社＝半角ピリオド

例：

加藤剛（編）

2004 『変容する東南アジア社会——民族・宗教・文化の動態』 東京：めこん.

植野弘子・蓼沼康子（編）

2000 『日本の家族における親と娘——日本海沿岸地域における調査研究』 東京：風響社.

吉原和男／クネヒト・ペトロ（編）

2001 『アジア移民のエスニシティと宗教』 東京：風響社.

Hefner, Robert W. (ed.)

2002 *The Politics of Multiculturalism: Pluralism and Citizenship in Malaysia, Singapore, and Indonesia*, Honolulu: University of Hawai'i Press.

Hefner, Robert W. and Patricia Horvatic (eds.)

1997 *Islam in an Era of Nation-States: Politics and Religious Renewal in Muslim Southeast Asia*, Honolulu: University of Hawai'i Press.

(5) 再版された図書，発行後に書籍に収録された論文を参照した場合

参照した図書の発行年を最初に記し，半角マル括弧（ ）内に初版年を記す。必要に応じて初版の書誌情報を入れる。

例：

馬淵東一

1974(1938) 「台湾高砂族の父系制における母族の地位」『馬淵東一著作集 第三巻』 9-65 ページ，社会思想社（初版：『民族学年報』1）.

(6) ウェブサイト上（オンライン）の資料・論文等を参照した場合

〔日本語〕

著者名（またはサイトの管理運営組織名）（改行）＝記事執筆年（もしくはデータの公開年）＝「ページ名」＝年月日アクセス＝全角ピリオド（改行）＝URL

〔英語等〕

著者名（またはサイトの管理運営組織名）（改行）＝記事執筆年（もしくはデータの公開年）＝“ページ名”＝半角ピリオド＝Accessed on Month Date, Year＝半角ピリオド（改行）＝URL

* URLにハイパーリンクが付されている場合は削除する。URLが2行以上にわたる場合は、適宜スペースを入れて改行する。

例：

外務省

2014「日・インドネシア外相会談（概要）」2014年3月10日アクセス。

http://www.mofa.go.jp/mofaj/s_sa/sea2/id/page3_000680.html

Department of Statistics, Malaysia

2014“External Trade Indices, Malaysia.” Accessed on March 10, 2014.

http://www.statistics.gov.my/portal/index.php?option=com_content&view=article&id=1125&Itemid=111&lang=en

(7) その他

- ・ローマ字アルファベット使用言語の雑誌名・書名は、イタリック体とする。
- ・文献の表示の最後には、日本語・中国語の場合は全角ピリオド（. ），ローマ字アルファベット使用言語の場合は半角ピリオド（. ）を付す。
- ・日本語，中国語，ローマ字アルファベット使用言語以外の言語の文献の記載は，当該言語の慣習的な表記法に従う。

6 注

- 6-1 注は脚注とする。文中で言及する場合は，必ず「注」と記す。「註」は使用しない。
- 6-2 注番号は1からおこし，1)のように半角数字，右側のみの半角マル括弧（終）で示す。フォントはcentury。注の数字とマル括弧は，本文中では注を付す箇所の右肩に上付きでつける（例：～である¹⁾）。ただし脚注ブロック内の注番号は，通常のフォントサイズで記し，上付きとしない。
- 6-3 投稿原稿における脚注ブロックの書式は任意とする。ただし，採用後提出する最終原稿においては，原則として脚注ブロック内のフォントサイズ，段落とも本文と同様にする。
- 6-4 注は原稿枚数に含まれる。枚数の10%以内を注の分量の目安とする（たとえば50枚の場合は5枚以内）。

7 図・表・写真

- 7-1 図，表，写真は，原則として執筆者が作成したものをそのまま掲載する。本文中に挿入箇所を分かりやすく示すこと（例：「→図1を挿入」）。
- 7-2 図，表，写真には，通し番号をつける（例：図1，図2…，表1，表2…）。また，番号だけでなく必ず表題またはキャプションをつける。

7-3 図および写真の表題（またはキャプション）は下に、表の表題は上に記す。

7-4 図、表ともに作成の際に使用した資料・文献を「出典：**」というように明示する。写真の場合は、撮影者を「**撮影」（または「出典：**」）というように明示する。

8 歴史的呼称

歴史的呼称は当時の呼称に従い、新字体・現代かなづかいで表記する。

9 その他の注意

ワープロソフトを使用する際には、以下の点に注意して原稿を作成すること。

9-1 入力画面では区別がつかなくても、印字するとその差が目立つ文字、記号。

例：ー（長音）と—（ハイフン）

X（ローマ字のエックス）と×（バツ）、1（数字）とl（Lの小文字）

9-2 日本語の文字および外国文字については、原則としてウィンドウズで使用可能な文字で入力する。英語表記で用いられるローマ字アルファベット以外の外国文字、別途インストールが必要なフォント、その他の特殊な文字・記号・フォントを使用する場合は、事前に編集委員に相談すること。

『白山人類学』 査読規定

1 目的

白山人類学研究会は、『白山人類学』の学術雑誌としての水準を確保するため、査読の制度をおき、その運営については編集委員会が責任をもつ。

2 対象

査読制度の対象となるのは、『白山人類学』に投稿された原稿（編集委員会からの依頼原稿を含む）のうち、論文および研究ノートとしての掲載を目的とするものである。

3 査読者

編集委員会は、投稿された原稿1編について、2名の査読者を選定し査読を依頼する。査読者の氏名は投稿者に通知しない。また、投稿者の氏名も査読者に通知しない。

4 査読の過程

査読者は、主に下記の第7項に挙げられた項目について、査読対象の原稿を評価し、掲載に関する判定をおこなう。査読者は、原稿に修正を求める場合、修正すべき点について具体的なコメントを記さなければならない。査読者は、定められた期限内に、編集委員会に対して原稿の掲載に関する判定結果とその根拠を表明しなければならない。

5 原稿の採択

編集委員会は、査読者の査読結果を十分に考慮・検討して、原稿掲載の可否を決定する。査読者2名の意見が大きく異なる場合は、編集委員会が査読者の意見をふまえて、独自に掲載の可否を判断することもある。編集委員会は、査読結果をすみやかに投稿者に通知しなければならない。

6 原稿の修正

再審査が必要とされた原稿の投稿者は、定められた期日までに修正原稿を編集委員会に送付しなければならない。この際、投稿者は、査読コメントに対する自らの改稿内容について、文書で説明を行わなければならない。編集委員会は、判定が「修正条件付き掲載可」の場合には、原稿の修正が適切になされていることを確認したうえで、原稿の採択を決定する。判定が「修正後要再査読」の場合は、改めて査読者に査読を依頼する。

7 査読の項目

査読者は以下の項目などを念頭において評価、判定、掲載区分の判断をおこなう。

A. 内容の評価

- (1) 広義の人類学に関わる学術的研究に貢献しているか
- (2) 記述されている内容は正確か
- (3) 議論の展開は適切かつ論理的か
- (4) 資料および文献の取り扱いが適切か

B. 表現・形式の評価

- (1) 表題・キーワードは扱われている内容に即して適切か
- (2) 文章の表現は明瞭で読みやすいか
- (3) 全体の構成や章・節の見出しの立て方は適切か
- (4) 図・表は有意に挿入され、かつ有効に使用されているか
- (5) 参考文献の記載方法は適切か

C. 採択の判定

- (1) 掲載可（修正を必要とせず、投稿時のまま掲載が可能）
- (2) 修正条件付き掲載可（主に技術面に関わる微細な修正のみを必要とする。再査読はおこなわない）
- (3) 修正後要再査読（再査読をおこなう）
 - a) 一部の用語、表現、パラグラフ等について、書き直しを必要とする
 - b) 一部の章または節について、書き直しを必要とする
 - c) 大幅な書き直しを必要とする
- (4) 掲載不可（内容が本誌の目的に即していない、あるいは学術誌掲載の水準に達していないことが明白な場合の判定。査読者は、評価およびコメントにより、判定の根拠を示さなければならない）

8 本規定の改廃

本規定の改廃は、白山人類学研究会運営委員の承認によっておこなう。

9 附則

本規定は、2018年4月1日から施行する。

編集後記

本号は東洋大学社会学部の教授であり、白山人類学編集委員でもある植野弘子教授の退職記念号である。また、本号では2017年11月11日に開催された白山人類学研究会第10回研究フォーラム「モノと人の移動にみる帝国日本——記憶・近代・境域」の特集も組んでいる。このフォーラムの代表も植野教授である。

編集後記ということで、いささか個人的なことを書くことをお許しいただきたい。私はポスドク3年の期間を経て、2017年度から東洋大学社会学部で助教を務めている。教員1年目ということもあり、講義に四苦八苦し、会議や大学の事務的な仕事に忙殺される毎日を送っている。大学院時代に先輩から「大学の教員になると、今のようには研究できなくなるよ」と言われていたが、まさにその通りの1年を過ごすことになった。ポスドク時代はすべての時間が自分の研究時間であった。研究内容は深まり、そして、新たに研究テーマが展開している状況であった。それが2017年度はパタリととまってしまい、研究できない状況をもどかしく思う1年であった。講義もうまく進めることができなかった。学部生たちにとっては厳しすぎたようである。A4用紙1枚のレポートが大変であるという学部生の感覚を忘れていて、たくさんのレポート課題を出していたら、すっかり嫌われてしまった。後半には開き直って「地獄のレポート特訓」と表して、書かせ続けたが、もう少しうまく授業設計できなかったであろうかと反省

している。「地獄のレポート特訓」は学生も大変であっただろうが、添削する私も大変であった。2018年度は効率的・効果的な講義を実施したい。また、研究のための時間も確保し、止まっていた研究を前に進めたいと思っている。

こんな大学教員1年目を過ごした私であるが、約30年後には退職することになる。まったく想像がつかない。いったいどのような教育研究人生を送るのであろうか。教育はもちろんのこと、退職間近になっても第一線で研究をしたいと思っている。そういう意味で、植野教授は私の目標となった。1年しか一緒に仕事をすることができなかったが、学生に向き合う姿勢など多くのことを学ばせていただいた。また、研究面でも退職年度に研究フォーラムを開催したり、長年、白山人類学編集委員として尽力してこられた。教育研究人生における具体的な目標ができたことが、2017年度の収穫であったと感じている。

本号には特集論文の他に、2本の論文が掲載されている。その内の1本は大学院生の論文である。上述したように大学院時代、ポスドク時代が最も研究に打ち込める時期だと思う。今後も、大学院生、若手研究者の論文投稿に期待したい。(寺内 大左)

白山人類学編集委員 Board of Editors

山本須美子 *	YAMAMOTO Sumiko *
植野弘子	UENO Hiroko
長津一史	NAGATSU Kazufumi
松本誠一	MATSUMOTO Seiichi
箕曲在弘	MINOO Arihiro
寺内大左	TERAUCHI Daisuke
* Chief Editor	

『白山人類学』投稿票

記載日： 年 月 日

<small style="display: block; text-align: center;">ふりがな</small> 投稿者 氏 名	
所属機関・職	

投稿の種類（丸で囲む）	論文 研究ノート 翻訳 資料 書評 資料・研究活動紹介 フィールド通信		
タイトル（日本語）			
タイトル（英語）			
本文の総枚数（英文要旨は除く。注は含める）	400 字詰 枚	図・表・写真の有無と点数	有・無 点
使用したワープロソフトの種類（原則として MS ワード）、ソフトのバージョン、保存した電子媒体の種類、Eメールにより投稿した場合は送信した日付			

連絡先（所属機関，自宅のいずれでも可。住所とEメールアドレスは必ず記入すること）

住所			
電話番号 （任意）		FAX 番号 （任意）	
Eメールアドレス			

* 投稿票は、白山人類学研究会ウェブサイト（下記）でダウンロードできます。

<http://hakusan-jinruigaku.toyo.ac.jp>

白山人類学

第 21 号

定価：2000 円＋税

発行日

2018 年 3 月 31 日

編集：発行

白山人類学研究会

〒 112-8606 東京都文京区白山 5-28-20

東洋大学社会学部 松本誠一 気付

編集協力

山口匠（東京大学総合文化研究科）

印刷

蔦友印刷株式会社

〒 113-0001 東京都文京区白山 1-13-8

TEL 03-3811-5343

FAX 03-5684-7001

発売

岩田書院（Iwata Shoin）

〒 157-0062 東京都世田谷区南烏山 4-25-6-103

TEL 03-3326-3575

FAX 03-3326-6788